

Wesley Hall News

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)



高中部(中等部)入学式

No. **80**
4.1/2004

説教 **シャローム** 小澤淳一.....2

特集 入学

ご入園おめでとうございます 川島祥子.....4

「日々新た」 樋口善一.....5

中等部新入生のみなさんへ 布施英俊.....6

高き目標(めあて) 大村修文.....7

信仰と真理の追求 前之園幸一郎.....8

青山なればこそその生活を 武藤元昭.....9

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その7 氣賀健生...10

キリスト教図書紹介 社会福祉と聖書～福祉の心を生きる 横堀昌子...12

私の教会 日本キリスト教団 京葉中部教会 西川良三...13

宗教センターだより...14

説教

「シャローム」

マタイによる福音書 第28章1～10節



小澤 淳一

初等部宗教主任

「すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。」(マタイによる福音書28章9節)

2004年度、新しい1年が始まりました。この4月に青山学院の各部に入園、入学された方々をお迎えし、喜びを持って過ごす時を迎えています。

青山学院は、みなさんもよくご存じのように、「キリスト教信仰に基づく教育」をする学舎です。キリスト教信仰の中心は、「主イエスは、キリスト(救い主)である」と信じる信仰です。キリスト教には、教会暦といってキリスト教のカレンダーがあります。この4月という時期は、キリスト教にとって最も重要なイースター(復活祭)の時を迎えます。このイースターこそが、キリスト教信仰の基となるからです。そこで、一緒に主イエスの復活のみことばを味わいたいと思います。

マタイによる福音書28章1節に「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。」とあります。このマグダラのマリアという人は、ルカによる福音書によると、7つの悪霊のとりこであって、主イエスによって悪霊から解放された人です。まさしく死の力のとりこであったところから解放されたのでした。その後、彼女は、いつも主イエスのそばにあり、イエスがご自身の「よみがえり」について語られた言葉を心に留めていたのかも知れません。しかし、主イエスの十字架を目の前にして、3日目の朝、マグダラのマリアはイエスがよみがえられるのだということを、信

じることができなかったと思います。だから、主イエスのお体が納められている墓に心惹かれ、イエスに会うために、お墓に行ったのでありましょう。「すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。』(2～6節)主イエスは、死者の中にはおられないという天使の宣言です。イエスはとりこではなかったのです。天使は続けて言います。「『さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。』あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」確かに、あなたがたに伝えました。』婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。(6～9節)

天使が婦人たちに伝えたのは、もうここには主イエスはおられないと言うことです。イエスは死人の中からよみがえられて、ガリラヤで弟子たちとお会いになるのだから、早くガリラヤへ行きなさい。それだけを天使は語ったのです。婦人たちは、その言葉をいきなり聞いたので、「恐れながらも、大いに喜び」、弟子たちに知らせるために走って

いくのです。しかし、主イエスは、まるで、天使にも、ご自身の姿を隠すように、婦人たちに会ってくださったのです。イエスは、「行く手に立っていて、婦人たちを出迎えてくださったのです。婦人たちにとっては、不意打ちであったでありましょう。恐れと喜びにあふれて走り出した婦人たちです。弟子たちに「主イエスがよみがえられて、ガリラヤで会ってください」ということを急いで知らせようとしている婦人たちに、イエスは、「おはよう」と言われたのです。

この「おはよう」という言葉は、「平安があるように」とも訳される言葉です。ヘブライ語で「シャローム」という言葉です。今でも用いられる日常の挨拶の言葉です。ユダヤの人たちは、「こんにちは」でも「こんばんは」でも「シャローム」つまり、「あなたに平安がありますように」という祈りの言葉で、挨拶をするのです。主イエスが、ここで「おはよう」と言われたのは、ただ、早朝であったので、朝の挨拶をしたのではないと思います。そうではなくて、「あなたに平安があるように」という本来の意味で、復活されたイエスだけが、約束できる「平安」を私たちのために祈ってくださるのです。この言葉によって、不安でいっぱいであった婦人たちの心から、「恐れ」が出ていったのです。婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏したのです。このときの婦人たちの気持ちは、どのようであったのでしょうか。もう2度とお会いできないと思いこんでいた主イエスに、再び会い、思わずその足を抱き、ひれ伏したのでありましょう。

最初に、今、イースターの季節を迎え、復活の出来事が、キリスト教信仰の中心であると申しました。

キリスト教の代表的なシンボルは十字架であります。どこの国に行きましても、教会には、十字架がかかげられています。十字架がペンダントやイヤリングなどアクセサリーのモチーフとして用いられることもあります。そもそも十字架とは何でありますでしょうか。それは古くからの処刑の道具であります。その中でも、もっとも苦しみの大きいものであったといわれます。十字架に磔になる者は、自分の体重を十字架に打ち付けられるときの太い釘のみで、支えなければならず、傷口から出血す

ることで、徐々に気が遠くなり、死を迎えるものでした。永遠に続くかと思えるほどの想像に絶する時間をかけて、死を迎えるのです。ですから、十字架刑に処せられる者というのは、その苦しみの大きさゆえに、大罪を犯した極悪人でありました。では、主イエスは、何をしたのでしょうか。主イエスは、いかなる罪をも犯しませんでした。それどころか、世の中から虐げられている人たちの友となり、病に苦しむ者を癒し、愛に生きた方です。では、なぜ、十字架に架からなければならなかったのか？それは、私たち、ひとりひとりの罪の身代わりとして、十字架につけられたのです。

今、「私たちの罪」と言いました。果たして自分にどんな罪があるのか、とお思いになる方もいるでしょう。聖書が示す罪は、この世界を造り、私たち人間を創ってくださった神との関係が絶たれていることです。何に従って生きるべきかがわからず、闇の中をさまようように生きている人間が自己中心的に生き、神が示してくださった愛に生きることができないでいること、それを罪といえます。その罪を「死」という仕方でも、人間に負わせるのではなくて、もう一度神との関係を修復することができるように、主イエスが、身代わりとなって十字架に架かり、死んでくださったのです。それだけではなく、その死に打ち勝つために、3日目に神は、主イエスをよみがえらせてくださった。だから、主イエスは、今も生きておられ、私たちを守り導いてくださるのです。

キリスト教信仰は、「主イエスは、キリスト(救い主)である」という信仰に立つことです。その神からの大きな恵みを与えられた人間が、その恵みに応えるために、どのように生きるかを問い続けながら歩む学舎が青山学院です。みなさんも、主イエスが救い主であるとただ、信じることで、神が与えてくださった恵みに、救いの恵みに、与ることができるのです。

4月に入園・入学されたみなさんが、また、すでにこの学舎で生活されているみなさんが、あのマグダラのマリアが、喜びのうちに、復活の主イエスにお会いし、喜びのうちに歩んだように、一人でも多くの方々が、同じ「喜び」で満たされることを願います。

ご入園おめでとうございます

川島 祥子

幼稚園主事



2004年度の新入園児の皆様を、年長、年中の子どもたちも心待ちにしておりました。花薫る園庭に子どもたちの元気な声が行き交い、前進していくように一人ひとりのいのちが溢れている四月を、感謝を以て迎えております。

新年度年頭において、それぞれの学年に与えられた、聖書の御ことばを確認したいと思います。年少は「心をつくして、主に信頼せよ。」(箴言3章5節*)、年中は「主にあっていつも喜びなさい。」(ピリピ人への手紙4章4節*)、年長は「感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロサイ人への手紙3章16節*)です。これらの御ことばは、人が人として成長していく過程を考えると根底におきたいことだと思います。

人が人として成っていくのは、人との関係の中であるとすでに聖書が教えているところなのです。創世記には、神さまが人をお創りになるとき「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と言われたことが記されています。これは、父なる神・子なる神・聖霊なる神が一体として唯一の神としてあるのですが、三位一体の神さまの「完全に愛を与え合う関係」に似せて、人も生きるようにされているということなのです。

後にアダムにエバが会っていきます。そのとき人は「ついに、これこそ わたしの骨の骨 わたしの肉の肉」と心からの喜びの歌を歌いました。人と出会っていくこと、人と関わることや信頼関係が養われることは人が人として生きるための基盤であるのです。

わたしたち保育者は、新入園児がまず保育者に信頼感を寄せることができるように心砕きます。ありのままの自分が受け入れられていることを実感し、幼稚園には友だちや先生がいて楽しいところなのだと思えるように援助していきたくと思っています。そうして初めて安心して遊ぶことができるのでしょうか。やがて、好きな人と一緒に遊ぶことを喜び、友だちと気持ちを伝え合い、豊かな遊びを作っていくのです。そばにいる仲間に助けを求めたり、逆に助けることも多くなります。神さまとのつながりの芽が、そして人と人とのつながりの芽が、しっかりしているならば、自分の力も発揮していけるのではないのでしょうか。自分らしく生きるというのは自分勝手に生きるというわけではありません。自分しかできない何かを他者のためにしていく喜びに生きるということだと考えます。年中になっても、また年長になってもいつも信頼関係、人との関わりが問われているといっても過言ではないでしょう。子どもにとって生活の場である家庭、幼稚園で信頼の芽を養い続けたいと思います。

初めての幼稚園生活で思い通りにならない葛藤に遭遇するでしょう。そのような中で他者との出会いが始まるのです。葛藤が喜びに変えられるように、保護者の方々とともに、子どもたち一人ひとりの一日を大切にしていきたいと思っています。そして、お父様やお母様たちが何よりも幼稚園の生活を楽しんでくださるようお願いしています。

* 日本聖書協会発行(口語訳)による

「日々新た」

樋口 善一

初等部部长



奇しくも皆さんは、青山学院が創立130周年を迎える記念の年度の入学となりました。青山学院は、1874年(明治7年)に僅か5人の児童で始められた女子小学校が原点になっています。米国より派遣された弱冠23歳の若い女性宣教師、ミス・ドーラ・E・スクーンメーカーによって開校され、めまぐるしく変化する時代の試練を受けつつも歴史と伝統を培い、先達の信仰に支えられた総合学園として今日まで発展してきました。「暗き場所を照らすまことに小さな光」として開校当初のようすがスクーンメーカー先生の日記に残されています。小さな小さな学校としてのスタートでしたが、スクーンメーカー先生の篤き想いは「地の塩、世の光」として現在のスクール・モットーに受け継がれ、青山学院の各部それぞれの段階に応じてさまざまな宗教行事や宗教活動の中に大切に生かされています。

現在の初等部の前身は、三井信託銀行の創設者であり、日本ロータリークラブの創始者でもある米山梅吉先生の私財により1937(昭和12)年に別法人、青山学院緑岡小学校として再開、発足されま

した。1946(昭和21)年戦後の新しい教育のスタートと共に学校法人青山学院に属する学校として青山学院初等部と改称し現在に至っています。その教育理念は、揺らぐことなく、キリスト教信仰に基づく姿勢で貫かれています。

初代校長となられた米山梅吉先生は、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(マタイによる福音書7章12節)という聖書の教えをくり返しくり返し児童に説いて聞かせたそうです。この御言葉は、児童の心に深く刻みつけられ、今でも当時のようすが鮮明に思い描けるとのことです。米山先生ご自身も聖書が示す奉仕の一生を全うされました。

初等部での1日の生活は礼拝をもって始まり、各クラスでの感謝の祈りで終わります。礼拝は児童も教職員も等しく聖書の御言葉に耳を傾け、讃美歌を歌い、感謝の心をもって共に祈り、静かに自分を見つめ、日々新たにされるひとときです。このことは、人が人として生きるための基本と考えています。神と人という縦の関係を絶対的な関係と捉え、人と人、人と自然、人と社会という横の関係の中で共に生きる大切さを日々の礼拝をとおして学びながら成長していきます。特に低学年の児童が歌う讃美歌は、声も大きく元気よく歌うので礼拝堂全体に響きわたりいつも感激しています。

今年度、青山学院のファミリーとして新しく加えられた若い命が、神と人との愛されながら、多くを学び、自分の賜物を生かし、祝福された実り豊かな成長を心より期待しています。

新入生の皆さん、そしてお父さま、お母さまご入学を心よりお慶び申し上げます。

中等部新入生の皆さんへ

布施 英俊

高中部副部長



新入生の皆さん、中等部へのご入学おめでとうございます。私は50年以上も前に経験した自分の中学校での入学式の情景を今でもよく耳で覚えております。つい、半月程前の小学校の卒業式では在校生の甲高い歌声で送られたのに、中学校では上級生の男子生徒が大人の低い声で校歌を歌って歓迎してくれたのです。その時の驚きは今でも鮮明です。中学校はもう大人の世界である事を身にしみて感じさせられた出来事でした。このように中学時代は子供から大人へと大きく変化する時期に当たります。そうした大事な時期に青山学院という学校に入学された皆さんは何と恵まれた幸せな生徒達かと思いません。多感で迷い多い中学時代に青山学院中等部は聖書によって進むべき方向をハッキリと示している学校であるからです。青山学院はキリスト教の精神による教育を行なっている学校でスクール・モットー(教育目標)として「地の塩、世の光」という聖書の一節を掲げております。「地の塩」とは塩のように世の腐敗を防ぐと同時にこの世に良い風味をもたらす人間になる、また、「世の光」とはイエス・キリストの光を宿す事によってローソクのように世を照らす人間になるという意味です。青山学院はそうした人間を育てようとしている学校なのです。

ところで、中等部に入学された皆さんのほと

んどは高等部、大学へと進学するわけですから、もう受験勉強からは解放されたようなものです。しかし、受験勉強をしなくてもいいという事はもう勉強しなくてもいいという事ではなく、これからは本当の勉強が出来るのだと考えてほしいのです。本当の勉強？それは、神さまから与えられた能力を「地の塩、世の光」となるために自分を磨いていくための勉強と言えるかも知れません。能力というものは自分のためだけでなく多くの人々の幸せのために用いようと努める時、一そう豊かに伸びて行くものなのです。

大学まで続いている一貫校は遊んだり、なまけたりするための学校ではありません。バランスのとれた人間を育てるのにふさわしい学校なのです。週5日制の実施もバランスのとれた人格形成には必要な制度であるとの判断から実施している面もあるのです。受験勉強にあてなくていい時間とエネルギー、そして週5日制から生まれる余裕を何かに打ち込んでほしいのです。クラブ活動に打ち込むもよし、自分の趣味を楽しむもよし、自分に出来るささやかなボランティア活動もあるでしょう。思い切り本も読んで下さい。今までしなかった新しい経験を一つでも多くしてみる事によって自分の世界を広げて行ってほしいのです。

私は先ほど「青山学院に入学された皆さんは何と幸せな生徒達か」と書きましたが、それは聖書の真理によって進む方向を示されているだけでなく、自分の好きな事、夢の実現に向かって打ち込む時間が自由にある事、そして皆さんは潜在的な能力や経済的な余裕にも恵まれている等の事を言ったのです。しかし、そうした「恵まれた環境」はそれに甘えたり、なまけたりするためでは決してなく、それを生かして成長して行くために与えられたものである事をしっかりと自分に言い聞かせてほしいのです。

三年後、卒業する時に「中等部に入って本当に良かった」と満足出来るかどうかは、この「恵まれた環境」をどう生かすか、自分自身の意欲にかかっている事を自覚して中等部生活をスタートさせて行って下さい。

高き目標(めあて)

大村 修文

高中部部長



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。高校生活へのたくさんの夢と希望を抱いておられることと思います。それと同時に様々な不安もあることと思いますが、お互いの違いを尊重しながら、未来に向かって共に大きく成長してほしいと思います。

一昨年、南米のチリから来て高等部の生徒として学んだ留学生が、帰国前の礼拝でこんな話をしました。「日本語もよくできず、とても苦労しましたが、ここまで頑張ってきてよかった。富士山に登ったとき、苦しくて途中でやめようと何度も思ったけれど、友達が励ましてくれたので、最後まで頑張った。頂上について自分が登ってきた道が見えて感動した。今はそれと似た気分だ。」一人で外国生活をしていくことには大変な苦労があったでしょうが、彼は友達に励まされながら頑張って頂上に到達したのでした。

「大空に 仰ぐ富士が峰(ね) 雲凌(しの)ぐ高き目標(めあて)を 望みつつ行く」。これは《青山学院の歌》として歌われていた歌詞の一部です。高校時代は人生の第一の節目と言ってよく、自分が将来どのような道に進むかを見据えながら、その目標を目指すときです。みなさんも自分の将来に向かって「高き目標(めあて)」を見定めて、それに向かって力強く歩んでほしいと思います。その「高き目標」とは、難関大学

や人気学部に入るとか有望な会社に就職することだけを意味するものではないことは、言うまでもありません。自分の依って立つところはどこか、自分は何を大切にしていくのか、何を見つめて生きていくのかということです。多くの友人と出会い、真理を追究し、深く考える豊かな3年間を過ごしていただきたいと願っています。

《青山学院の歌》の5番には「天地(あめつち)は よしや移るも揺るぎなき 永遠(とわ)の真理(まこと)を 守る青山」とあります。揺るがない「永遠の真理」とは、天地万物を支配する神が、イエス・キリストを通してご自分の本質である《愛》をわたしたちに示された、ということです。揺るぎなき神の愛については、聖書全体を通して示されています。青山学院が堅く守り続けている「永遠の真理」の確かさに出会ってほしいと思います。

「ひとりひとりの生徒の人格を育み、その自己実現を支える。また与えられた自分の力を他者のためにも使い、隣人と共に生きることを喜び、平和な社会に貢献する人間の育成を目指す」。これは、青山学院教育方針に基づいた高中部の教育理念です。

みなさんは、神によって一人ひとり特別に造られた、かけがえのない存在なのです。それぞれ異なったよさ、才能、力が神から与えられているのですから、その能力を最大限に生かして、自らの目指す方向に成長していく、つまり自己実現を大いにしていただきたいと思います。しかしそれは、自己中心的な生き方を意味していません。

イエス・キリストの生涯が徹底的に他者のためであったことを学ぶことによって、一人ひとりに与えられた能力を自分のためと同時に他者のためにも使い、さらに隣人と共に生きる《共生》の大切さと楽しさを学んでいただきたいのです。

これこそ青山学院が大切にしている《高き目標(めあて)》なのです。

信仰と真理の追求

前之園 幸一郎

女子短期大学学長



ご入学おめでとうございます。みなさんは、これから始まる本学での学園生活について大きな期待と喜びとを胸にあれこれ楽しい計画を思い描いておられることでしょうか。新学期が始まるまさにこのスタートの時期に、ぜひみなさん全員に自覚して注目していただきたいことがあります。それは、本学の教育の基本がキリスト教主義によっているということです。本学院の教育方針についてあらかじめ理解しておくことは、これから展開されるみなさんの学生生活をより一層豊かで実りあるものとするにちがひありません。

青山学院教育方針の中に「神の前に真実に生き真理を謙虚に追求し 愛と奉仕の精神をもってすべての人と社会とに対する責任を 進んで果たす人間の形成」という格調の高い言葉が述べられています。「神の前に真実に生きる」とは絶対者であり万物の創造主である神を敬い畏れるということでしょう。それは、聖書の「主を畏れることは知恵の始めなり」(initium sapientiae, timor Domini, 箴言1:7)の言葉にある通りです。そして、その前提のもとに本学の教育においては「真理を謙虚に追求する」ことが中心になります。さて、

それでは既製品の真理などというものがあ
り得るのでしょうか。いいえ、あり得ません。
それは各自が謙虚に自分の頭と魂と手とを
通じて獲得するしか他に方法のないものだ
と思われま。出来合いの知識を暗記する
ことと真理を追求することは根本的に異な
るものなのです。

例えば、近代科学の父と呼ばれるガリレ
イがその地動説のために宗教裁判に付され
たことはよく知られています。ドイツの作
家ブレヒトはその作品『ガリレイの生涯』
の中でガリレイに「科学の目的は、無限の
英知への扉を開くことではなく、無限の誤
謬にひとつの終止符を打って行くことだ」
と言わせています。ローマ教皇ヨハネ・パ
ウロ二世は、ついに実に1992年10月31
日に359年4ヶ月9日を経てガリレイ裁判
の過ちを認めました。これなどまさに「真
理の謙虚な追求」の歴史的事例の一つだ
といえましょう。

さて、青山学院の教育方針と同様の教育
目標を掲げているのがイタリアのローマ大
学です。ローマ大学は、東京大学が「赤門」
と呼ばれるように「サピエンツァ」
(Sapienza・知恵)と別称で呼ばれています。
それは、ローマ教皇ボニファティウス八世
が1303年に「主を畏れることは知恵(サ
ピエンツァ)の始めなり」の目標のもとにロー
マ大学を設立したことに始まります。私は
ほぼ40年ほど前に、ローマ大学の教室で
留学生として講義を聴講したことがありま
す。その大学は、ミケランジェロがローマ
時代の古代建築の廃墟を新たに建造した遺
跡の中にあり、その各講義室の正面には十
字架が掲げられておりました。それは青山
学院の教育と同じように信仰と学問との深
い結びつきを物語るものでした。

キリスト教の信仰にもとづくわが青山学
院の教育によって多くの「地の塩、世の光」
として生きる人材が形成されることを願っ
ております。

青山なればこそその生活を

武藤 元昭

大学学長



新生の皆様、御入学おめでとうございます。晴れて青山学院大学の一員になられましたこと、心よりお祝いし、歓迎致します。

多くの皆様は、受験の段階から本学がキリスト教信仰によって建てられた大学であることを承知して受けてこられたと思います。早速、入学式が礼拝形式で行われたことで、納得もされたと思います。

このように、本学に入学されたということは、他の大学に入学するのとは異なる特別な意味を持っているということになります。それをどう意識するか、どう活用するかは、皆様の今後の学生生活に関わってきます。

青山学院は、今年創立130年を迎えます。皆様はこういう記念すべき年に入学されたわけです。今年は、それに関わるさまざまな催しが行なわれますので是非楽しみにして下さい。また、それを通して青山の創立の頃の様子を知り、建学の精神にも思いを馳せて下さい。青山キャンパスの正門に入ってすぐ右手の総合研究所ビルには、大きな像が立っています。これは、青山が拠って立つメソジスト派の創始者ジョン・ウェスレーの像です。キリスト教概論の時間にでも、ウェスレーに就いて学ぶ機会があると思います。青山の歴史を語る資料は、正門から銀杏並木を歩いて突き当たりの間島記念館にあります。お

暇な折に立ち寄ってみて下さい。こうして、青山が先人達の熱い信仰心によって設立され、発展してきたことがよくわかるのです。

ここまで読まれて、私が「青学」と書かず「青山」と書いていることに気付かれたと思います。私は、中等部から高等部までを青山学院で学びました。その頃には、「青学」という略称は誰も使いませんでした。「青山」か「学院」でした。現在では「青学」が一般的になってしまいましたが、私はあまり用いたことがありませんので、ここでも「青山」とさせていただきます。

さて、話を元に戻します。皆様は、数ある大学の中からこの青山に導かれて入学されたのです。となれば、この大学でしか学べないことを学び、この大学でしか得られないことを得て卒業しなければもったいないと思います。昨年開学したばかりの相模原キャンパスでの学生生活も、多分得がたい思い出を作ってくれるでしょう。緑に恵まれた広々としたキャンパスと、環境に配慮した施設、最新の設備は青山が誇るものです。また、渋谷にある青山キャンパスも、他の大学の人から羨ましがられる落ち着いた雰囲気を持っています。それに立地条件にも非常に恵まれています。そうした環境面を大いに享受するのも、本学ならではのことでないかと思いますが、それ以上に、青山には歴史と伝統が築き上げた素晴らしいものがあります。それは青山の学生、卒業生の人柄の良さです。

青山の卒業生、学生は、社会人から人間性において高く評価されています。学生諸君と教職員との関係も和やかです。こういうことは、中にいると見えにくいのですが、外へ出てみればわかるのです。皆さんは、そういう人間関係の中で4年間を過ごすことが出来るのです。私も、学生、卒業生とのお付き合いの中で、青山にいて良かったという思いをしばしばさせていただいております。皆様にも私が受けているような恵みを是非受けていただきたいと思います。青山はそういう機会を沢山与えてくれる大学なのです。良い学生生活を送って下さい。

『六合雑誌』1880(明治13)年創刊、1921(大正10)年廃刊。御存知の方もいらっしゃると思いますが、約40年にわたって、近代日本の思想や文化に絶大な影響を与えたキリスト教雑誌です。「青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料」紹介の第7回は、この『六合雑誌』の御紹介を致しましょう。

前回に紹介した『護教』『福音新報』が専らキリスト教界の機関誌であったのに対して、『六合雑誌』は単にキリスト教各派の代弁者たるにとどまらず、近代日本の代表的な文化総合雑誌として、キリスト教の立場から、その声を代表して時代の思想をリードし、近代日本の抱える諸問題に果敢に取組んだ雑誌でした。創刊の母体となったのは、東京青年会で、小崎弘道、植村正久、田村直臣など、のちに明治期の日本キリスト教界を代表することになった青年達でした。ちなみにこの東京青年会は、この年1880年に結成されたばかりのキリスト教青年団体でした。

『六合』とは、天地及び東西南北の六方を合わせたという、気宇壮大な意味で、初期の青山学院の実質的な創立者のひとりであった津田仙の命名でありました。(津田仙については『青山学報』171号参照)

青山学院資料センターには『六合雑誌』が次のように、ほぼ揃っています。

創刊号、13～24号(20号を除く)、48、58、68各号が所蔵されていて、初期のものは残念ながら手薄です。83号(明治20年)から最終号(481号・大正10年2月1日)までは、164～166号、168号を除いて、全部揃っています。また、当資料センターには、『六合雑誌』の解説文献があります。(1988年、不二出版、10,000円)これには、六合雑誌全巻の寄稿者、論題が一覧となっている他、この『六合雑誌』の続刊ともいえる『創造者』第1巻(後述)が収められています。またこの本の冒頭

には、鈴木範久立教大学名誉教授による詳細な解説があり、本稿も殆どこれによっています。

さて、『六合雑誌』は、東京キリスト教青年会の手によって、原則として毎月一回(月に二回発行された時もある)刊行されましたが、後半になると、発行主体はユニテリアン派に移ってゆきます。

創刊号に寄せた小崎弘道の「六合雑誌発行の趣意」は、次のようにうたっています。

視ヨ眼ヲ放テ都鄙ノ現状ヲ視ヨ……見ル者ヲシテ其盛ナルニ驚喜セシメザル者ナキニ非ズ、然ルニ特リ風俗ニ至テハ依然進歩セザルノミナラズ却テ日ヲ追テ退却シ詐僞ヲ以テ良策トナシ狡猾ヲ以テ鋭智トナシ信義上下ニ薄ク淫風日ニ盛ニシテ醜俗公ニ行レ浮薄、輕驕、風ヲナシテ廉恥ノ風地ニ墜チ道義跡ヲ覆載ノ間ニ絶タントス……智識ノ発達彼ガ如ク其レ速カナリ而ルニ徳義ノ進歩ニ至ッテハ此ノ如ク遲鈍ニシテ却テ退歩ノ勢アルハ抑モ何ソヤ、蓋シ人ニ宗教ナキニ因ルノミ否ナ宗教ナキニアラズ只上下共ニ信ズベク守ルベキ眞成ノ宗教ナキニ因ルノミ……

と喝破し、明治維新後の世の風俗の頹廢が、日本を亡国に導くことを憂え、文明の精神がキリスト教にこそあり、キリスト教にもとづいて人心の改革をはかる、即ち日本の精神革命をめざす、と主張しています。一語々々、当時の血気盛んなキリスト教者青年達の、新しい雑誌にかける気宇壮大な意気込みが、うかがわれます。

初期の『六合雑誌』には、小崎弘道の「基督教講究セサルベカラズ」(5号)「基督教ヲ信ズルノ理由」(71、72号)、内村鑑三の「空ノ鳥ト野ノ百合花」(35、37号)など、直接キリスト教に関する論考が多くを占めています。これはキリスト教による精神革

命をめざしていた『六合雑誌』としては、当然のことでしょう。また、日本で初めて社会主義思想を紹介した論文「近世社会党ノ原因ヲ論ス」(小崎弘道、7号)なども見られますが、唯物思想に対するキリスト教の弁証が立論の主旨でありました。また、高橋五郎「女権真説」(77号)は、初期の女権論として、注目に値するものでしょう。これら初期の論叢は、残念ながら本資料室所蔵の部分に含まれていません。(上述)

1880～90年代に入ると、内村鑑三の所謂不敬事件や、井上哲次郎の「教育ト宗教ノ衝突」論争がおこります。帝国憲法発布(1889)、教育勅語発布(1890)によって、日本の教育と思想が、国家主義へとハッキリ傾斜し始めた頃、『六合雑誌』はまさにその本領を発揮します。横井時雄の「忠孝と基督教」(125号)や「徳育に関する時論と基督教」(144号)、内村鑑三の「日本国の天職」(136号)などはその代表的な論考で、キリスト教の立場を明確に表明したものといえましょう。

やがて編集陣に岸本能武太、安部磯雄、浮田和民らが加わり、『六合雑誌』にユニテリアン派の自由主義の色彩が加わってきます。それと同時に社会主義的傾向が前面に出てきます。片山潜によるラサールの紹介(192、194～198号)など、恰も『六合雑誌』が日本の社会主義の啓蒙雑誌の観を呈してきます。

207号に、ユニテリアン派の機関誌『宗教』と『六合雑誌』の「合併の趣意」が載ります。これは“宗教上、道徳上、社会上両雑誌の立脚地は殆ど區別し難きもの”となったから、という理由によるものでありました。新『六合雑誌』は、“一宗教若しくは一学派の機関にあらず思想の自由を貴び精神の誠実を重んず”とうたっています。

この頃になるとユニテリアン派の自由主義・合理主義の編集方針は一層明確になってきて、寄稿者の顔ぶれも一層拡くなり、鈴木大拙、井上円了



から幸徳秋水にまで及ぶようになってきます。幸徳秋水が「社会主義と国家」(263号)を寄せるなど『六合雑誌』が社会主義にも大きく足を踏みこんでいることを示しています。足尾銅山鉍毒事件については、津田仙が深く関係していたこともあって、屢々とりあげています。また日露戦争に際しては、非戦論の論調が大きく目立ちます。

1912年、政府の主催による三教会同(仏教、神道、キリスト教)に際しては、“政治家の欺瞞”を見抜いていた内村鑑三などによる非妥協的態度がうち出されています。いわゆる大正デモクラシーの時代には、民主主義や婦人参政権問題について、意欲的にこれと取組んで、吉野作造による「選挙権拡張論」(394号)なども見られ、与謝野晶子も寄稿者の中に名を連ねています。

この他、当時世界的な思想家、トルストイや、ベルグソン、メーテルリンク、タゴールなどを意欲的にとりあげています。そして次第に宗教文芸誌的な性格が濃厚になってゆきますが、それは『六合雑誌』が、そういう時代の空気をリードしていったと考えられると思います。

さて、『六合雑誌』は481号(1921年2月1日)を以て終刊します。ところがこの年の3月に『六合雑誌』は『創造者』と改題されて発行されているのです。然しこの『創造者』は第1号のみで絶版となります。その辺のいきさつは、よくわかっていません。いずれにせよ、『六合雑誌』は481号を以て廃刊、『創造者』はその改題版として、理由はともあれ第1号のみを以て消滅した、ということなのです。

『社会福祉と聖書～福祉の心を生きる』

石居正巳・熊澤義宣監修 (LITHON, 1998年)

横堀 昌子

女子短期大学 児童教育学科助教授



キリスト教と福祉の心を編みこんだ珠玉の一冊をご紹介します。信仰と社会福祉の課題、日本の福祉を築いたキリスト者の働き、日本を代表する社会福祉実践家が語る「私を支えた聖書のことば」等から成るこの本は、キリスト教がいかにかこの国の社会福祉の柱となり続けてきたかの証しといえます。中でも故人を含む福祉の歴史を刻んできた人たちを支えた聖句と貴重なエッセイの数々は心に響きます。

「あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ 25:40)これは、キリスト教社会福祉が命の泉としてきた聖句のひとつです。社会福祉の歩みを顧みると、草創期にその業を担った先駆者の中に多くのキリスト者の存在と働きがあったことは歴史的な事実です。ここから、キリスト教の人間観、社会観、社会関係観がいかにか社会福祉の営みと深く関連してきたかがわかります。他者と痛み・かなしみを分かちあう。他者の重荷を負う。それは、一人のクリスチャン・ソーシャルワーカーであり教員である私の基盤であり、出発点であり、到達目標でもあり続けてきました。

キリスト教に基づく社会福祉とは、まさに聖書の教えるところの信仰の実践、愛の具現化にほかなりません。「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ。」(マタイ 19:19)の聖句もまた、大きな命題と言えるでしょう。キリスト教社会福祉とは、決して人をケアする側・「専門家」の信仰の問題だけではありません。イエスのまわりには売春婦や奴隷がいたといひます。「イエスが目を注ぎ給うたところ。」イエスのまなざしに私たちのそれを重ねてみたいものです。たとえどのような危機的状況や「障害」を抱えて生きる人でも、神様の愛される人、隣人として存在していることを尊重し、「ともに」生きる、そうした営みから人間の尊厳と真の自由、平和が創り出されるとするのがキリスト教社会福祉の価値観です。厳しくもある愛の実践、それは実は福祉にとどまりません。考えてみると私たちの生活には「他者と生きる」ことが絶えず与えられています。隣人との関係性を創りながら生き、目に見えない大事なものを共有しコミュニティを創るチャンスが与えられているのです。その意味は何と深いことでしょうか。

一羽の鳥、一匹の迷える羊、子どもの一人ひとり、この世の最も小さい者のひとり、つまり神によって創造されたかけがえのない存在に絶対的価値を置かれたイエス。その教えの深さにうたれます。社会全体が混沌とし、福祉の領域もいかなる哲学や価値観を持つのかその根底が問われている今、この本を改めてひもといた筆者に少しわかってきたことがあります。重要なのは何がなされるかではなく、何に向かってなされるかなのではないかと。他者と生きる人生の「宿題」を、まずはこの青山学院というコミュニティの日々の生活から、と思わされています。

日本キリスト教団 京葉中部教会

西川 良三

高等部教諭

東京駅から京葉線に乗って終点の蘇我で内房線に乗り換え、二つ目の八幡宿という駅で降りてからバスで15分ぐらい内陸部に向かうと辰巳台団地という、元は京葉工業地帯に勤める人たちのために建設された社宅が立ち並ぶ地域が現れます。この中に、1962年に石丸実牧師の開拓伝道によってつくられた京葉中部教会があります。

京葉中部教会は千葉県市原市にあって現住陪餐会員42名、礼拝出席者30名ほどの小さな教会で、会堂を持たず、光の子幼稚園というキリスト教主義の幼稚園の一室を借りて礼拝を行っています。長い間の伝道所時代の後、1994年に第2種教会になりましたが、現在も基本的には伝道所時代の形を踏襲しています。開拓者であった石丸実牧師は6年前に天に召され、現在は8年前に副牧師として赴任してきた大久保正禎牧師が主任担任教師として牧会しています。

京葉中部教会について述べる時、まず会員が言うことは「0歳児から90過ぎのお年寄りまで一緒に礼拝を守っている教会」ということです。幼稚園を使っていることから礼拝出席者の中に割合幼稚園の父母が多く、園児の弟、妹になる赤ちゃんがよくお母さんに抱かれて礼拝に出ます。会員の最高年齢は97歳の男の方で最近のご高齢のためあまり出席できなくなってしまいましたが、それでもクリスマスや、体調が許すときは参加されています。

2ヶ月に一度は、教会学校(「子供の教会」と呼んでいますが)の子供たちと大人と一緒に礼拝を守る「合同礼拝」を行っています。そこでは子供も大人も同じ讃美歌を歌い、同じお話を聞きます。



京葉中部教会

〒290-0003
市原市辰巳台東3丁目11
TEL. 0436-75-2455
FAX. 0436-52-2455

教会のもうひとつの特徴は、「アジアの国々との関わり」ということでしょうか。前任の石丸牧師が財団法人「京葉教育文化センター」というアジアの国々とのさまざまな交流を行う団体の専務理事を務めていたこと、また地域にアジアの国々から来て働いている人が数多くいることからこの結びつきができています。教会は「アジアの隣人のためのバザー」を毎年光の子幼稚園、及び京葉教育文化センターと共催で行い、収益金はすべてアジアの国の人たちのための人権擁護団体、社会福祉施設等に寄付しています。会員の中には京葉教育文化センターの活動に関わったり、地域の外国人の方々のための日本語教室のボランティアとして働かれている方もいます。また、もう国に帰られてしまいましたが、つい最近まではベトナムからの青年が、客員としてほとんど欠かさず礼拝に出席されていました。

小さな「草の根」ですが、会員みんなで大事に育てている教会です。

幼稚園 より

春になり、園庭には、昨年のおきに子どもたちと植えた球根から色とりどりの花が咲きそろいました。

進級・入園と喜びに満ちた季節です。進級した子どもたちの「おおきくなった」嬉しい気持ち、はじめての幼稚園に期待と不安でいっぱいの新入園児のドキドキした気持ち……様々な思いをもって登園してくる子どもたち一人ひとりとの出会いを大切に、穏やかな心持で祈りつつ、新年度の歩みをスタートしたいと思います。

1学期の予定は次のとおりです。

- 4月12日(月) 入園式
- 14日(水) イースター礼拝
- 19日(月) 保護者会
- 21日(水) 誕生日会(年長・中)
お楽しみ会食
- 22日(木) 誕生日会(年少)
- 23日(金) 健康診断
- 5月10日(月) 母の日礼拝
- 19日(水) 誕生日会(年長・中)
- 20日(木) 誕生日会(年少)
- 21日(金) 会食
- 6月 7日(月) 保護者会講演会
- 12日(土) ファミリーデー
- 18日(金) 会食 防災訓練
- 23日(水) 誕生日会(年長・中)
- 24日(木) 誕生日会(年少)
- 7月 2日(金) バイキング会食
- 5日(月) 保護者会
- 9日(金) 誕生日会
- 13日(火) 終業礼拝

(教諭 久洋子)

初等部 より

新しい1年生120名を迎え、新しい気持ちで1学期が始まりました。この1年も、神様の導きと守りのうちに過ごすことができればと思います。今年度は、

初等部の新校舎建築が始まる年でもあります。様々な変化の中で、守るべきものを大切にしたいものです。

新1年生保護者キリスト教教育オリエンテーション

4月7日(水)~9日(金)

初等部の中心であるキリスト教教育の概要と、ご家庭で大切にしていきたいことなどについてオリエンテーションを行います。

受難週祈禱会

4月7日(水)~9日(金)

イエス・キリストの最後の1週間を聖書のみことばを読みながら味わい、ともに祈りを捧げる1週間です。

イースター礼拝

4月13日(火)

イエス・キリストの復活を覚えて、日本庭園の前で野外礼拝を守ります。礼拝後、全校児童で、イースターエッグをいただきます。

お母さんへの感謝の集い

5月7日(金)

母の日を覚えて、神さまの恵みとしてお母さんを与えられていることを覚えて礼拝を守ります。

(宗教主任 小澤 淳一)

中等部 より

教職員春の修養会

中等部では、春秋二回の教職員修養会を実施しています。春は心の養いを求め、秋はキリスト教教育を学びます。今春は4月8日に、日本聾話学校校長の川田植(しげる)先生をお招きし、お話を伺います。教団新報04年2月21日号第一面に聾話学校と川田校長の紹介記事が載っています。

イースター礼拝

今年のイースターは4月11日ですが、中等部では新学期の日程との関係で、23日(金)に保護者もお招きして礼拝をします。説教はジョージ・ギッシュ先生。

ジョージ・ギッシュ先生は大学教授でいらした時も、度々中等部生のために良いメッセージをして下さいました。

母の日・家族への感謝の日礼拝

日本で最初に「母の日礼拝」を守ったのが青山学

院で、ここから、この大切な礼拝が日本全体に広まっていきました。中等部では5月7日(金)に、保護者、ご家族を大勢お招きして礼拝と感謝の集いをします。礼拝のメッセージは赤羽教会牧師、東京聖書学校教授の深谷春男先生です。深谷先生は、日本キリスト伝道会のエバンジェリストとして日本だけでなく、海外でも福音宣教のために大変な働きをしておられます。

第二部の感謝の集いでは、生徒による音楽演奏や家族への感謝のメッセージの作文朗読、カーネーション贈呈など楽しいプログラムが続きます。

(宗教主任 石丸 泰樹)

高等部 より

入学式、始業式

高等部は4月7日(水)に入学式を行い、新入生を迎えます。

8日に新入生オリエンテーション、9日に全学始業式、またオリエンテーションが行われます。12日(月)は全学年英語テスト、生徒会による新入生歓迎会が行われ、13日から授業が開始されます。

イースター礼拝

今年のイースターは4月11日の日曜日です。高等部ではイースターの次の日、12日(月)にキリストの復活を祝って特別礼拝を行います。講師は田中かおる先生(安行教会牧師)です。

保護者聖書の会

今年度も保護者の方々のための聖書の会を毎月一度持ちます。聖書に初めて触れる人たちの会ですので保護者であれば誰でも参加できます。具体的な日時は「高等部便り」でお知らせします。青山学院の教育方針の基本にある聖書を学び、心の糧としていただきたいと思います。

(宗教主任 坂上 三男)

女子短大 より

キリスト教学校教育同盟推薦入学生、内部進学者、キリスト者歓迎会

4月3日(土)11:00

入学式の前に保護者を含めた歓迎とガイダンスの会をおこないます。

入学式

4月3日(土)13:00

始業礼拝

4月5日(月)9:00

説教:ロバート・タヒューン 宣教師・一般教育教授
「新しい見方を求めて」

礼拝堂ガイダンス

4月8日(木)11:00と13:00からそれぞれ30分ずつ。

渡辺善忠兼任講師による短いオルガンの演奏があります。

短大イースター礼拝

4月14日(月)

通常の礼拝として行います。説教:伊藤 勝啓宗教主任。
「心はうちに燃えて」ルカ24章13~32節から。

春のキリスト教活動研修・親睦会

4月24日(土)10:00~15:00

短大礼拝堂、体育館、食堂にて

宗教講演

5月19日(水)12:00~13:20

講師を交渉中。平和の実際について考えます。

前期チャペル・コンサート

4月20日(木)12:30~13:20

今回は、ハーブ奏者の佐々木冬彦氏(日本キリスト改革派・松戸小金原教会会員)珍しいコンサートになりそうです。

サマー・キャンプ・イン・軽井沢

7月26日(月)~28日(水)

バスで学院の中軽井沢寮で行います。

楽しいプログラムも用意されています。

(宗教主任 伊藤 勝啓)

大学 より

キリスト教推薦入学生オリエンテーション

4月3日(土)11:00 ガウチャー記念礼拝堂

キリスト教概論履修オリエンテーション

4月6日(火)7日(水) ウェスレー・チャペル

イースター礼拝

青山 4月12日(月)ガウチャー記念礼拝堂

宗教センターだより

新入生歓迎・イースター礼拝

相模原 4月12日(月) ウェスレー・チャペル
青山第二部 4月13日(火) ガウチャー記念礼拝堂

前期チャペル・ウィーク

5月24日(月)~29日(土)

大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化 紀要(19)』

George W. Gish, Jr. 日本文化とキリスト教の試論(2)

大島 力 統一体としてのイザヤ書

- 研究史概観と問題の所在 -

東方 敬信 イエスとその時代の経済世界

廣瀬 久允 「ハリリーポッター」考(2)

伊藤 悟 子どもとともにささげる礼拝は可能か

嶋田 順好 パウロの回心とアナニアの導き

鈴木 有郷 合同メソジスト教会への問いかけと提言:

- 海外宣教師の視点から

大庭 昭博 霊性と社会倫理

深町 正信 ジョン・ウェスレーの信仰思想(19)

- ケーカールイズムからの影響 -

オリヴィエ・ミエ キリスト教とイスラム教の

対話は可能か? 他

2004年度学部選出宗教委員

(文学部)大森秀子、河本洋子、那須輝彦

Wayne E. Pounds, Joseph V. Dias

(経済学部)橋本清一、黒沼 健、芹田敏夫

(法学部)Suzy E. Fukuda, Paul Mennim

(経営学部)玉木欽也、森川信男、Charles M. Browne

(国際政治経済学部)木村光彦、茂 牧人、渡邊千秋

(理工学部)二宮理憲、矢部義之、David W. Reedy

James W. Pagel

(国際マネジメント研究科)井田昌之

(法務研究科)Karl-F. Lenz

宗教センター・グループ活動について

各キャンパスで開かれている自由参加の研究会で、宗教主任が担当する「青山学院大学聖書研究会」の他、宗教・思想・文学・社会・自然科学・福祉・音楽など大学にふさわしいテーマをキリスト教信仰との関わりにおいて勉強する「フォーカス・グループ」(キリスト者教員が担当)があります。

詳しくは『キリスト教活動のしおり』『Kairos』をご覧ください。

(宗教センター事務長 田中 健夫)

本部 より

教職員新学年度礼拝

4月8日(木)16:30 ガウチャー記念礼拝堂

説教:東方 敬信(学院・大学宗教部長)

イースター音楽礼拝

4月19日(月)17:30(予定)ガウチャー記念礼拝堂

教職員・学生のための祈りの集い

毎月第一金曜日17:10が原則ですが、前期は下記の日に予定しています。どなたでも自由にご参加ください。

4月16日(金) 5月7日(金) 6月11日(金) 7月2日(金)

(宗教センター事務長 田中 健夫)

ジョン・ウェスレーをめぐる(その2)

「危機一髪」

「火事だ!」との最初の叫び声がかつてから、わらぶき屋根三階建ての牧師館が放火によって全焼するまでに、15分とかならなかつたらしい。家族はみな命からがら逃げ出したが、6歳前のジョンは寢床に取り残されてしまった。窓近くの箱に登ったこの子供を、屈強な男の背中に乗った小柄な男が抱き留め、下に降ろしたその瞬間に屋根が焼け落ちた。まさに危機一髪という他ない。

ウェスレーの初期の肖像画には、火災に包まれた家が挿絵のように描かれている。現代ならさしづめPTSDを心配するような事態なのだが、彼はアモス4:11やゼカリヤ3:2により、自らのことを「炎の中から取り出された燃えさし」と呼び、墓石にもこの言葉が刻まれることを願った。ジョン・ウェスレーの使命感、また摂理に対する信仰の源泉は、まさにこの記憶にある。(廣瀬久允)

編集後記

ウェスレー・ホール・ニュース第80号をお届けします。今年度は青山学院創立130周年という記念すべき年です。その年に入学された皆さんは130年の生きた伝統の中で教育を受けることになります。本号は入学特集号です。それぞれの部の責任者の方々の入学歓迎の文章を読むとき、130年間生き続けて来た伝統が何であるかが分かるでしょう。それはキリスト教信仰に基づく教育です。教育は真実の人間性を目指して行われるものです。青山学院の教育は真実の人間性が何であるかをキリスト教信仰によって示され、そこに教育の土台を据えているのです。(清水)

Wesley Hall News 第80号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
URL.<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社